

# 田淵安一による岡本太郎作品木枠の再利用について

副田 一穂、桑名 彩香

## 1. はじめに

愛知県美術館が2003年度に作家・田淵安一本人から受贈した《鬼に金棒》[図1]の木枠には、画面とは天地逆向きに「誕生」岡本」と墨書がある。残念ながらこの理由について作家存命中に直接確認する機会を持たなかったため、稿者らは、田淵が本来は別の作品の画布と木枠、もしくは木枠のみを再利用したと仮定して、あらためてその理由と経緯について調査を行った。

作品の基本データは下記の通り。

作者:田淵安一

(1921年福岡県生まれ、2009年没)

作品名:鬼に金棒

制作年:1953年

技法、材質:油彩、画布

寸法:100.0×81.5cm

作品登録番号:JO200300007000

収蔵年月日:2004/03/01



図1 田淵安一《鬼に金棒》

## 2. 裏面および木枠から得られる情報

画布の裏面 [図2] には「Oni en arme./Yasse Tabuchi/1953/鬼に金棒」とあり、田淵の自署と思われる。木枠には(1)墨書で「誕生」岡本」、(2)鉛筆で「1026」、(3)スタンプで「F...O」「A」、(4)ラベルシール「TRANSPORT YAMATO FRANCE/10, RUE DU CHEMIN VERT - 75011 PARIS/355-04-70/Artiste Y. TABUCHI/Prêteur Y. TABUCHI/Titre ONI ARME/N/Réf. 823」、(5)「他館 ①」とある。(1)と(2)は画面と天地逆向き、(3)と(4)は画面に-90度の向き、(5)は画面と同じ天地である。

(1)の墨書「誕生」岡本」[図3]は、田淵が本作の制作時期に拠点としていたパリで接触のあった画家、岡本太郎を想起させ、この特徴的な筆跡も岡本による自署と考えて違和感はない。



図2 田淵安一《鬼に金棒》裏面



図3 墨書部分

### 3. X線による画面の調査

そこで、まず田淵が岡本《誕生》の画布及び木枠を再利用したと想定し、元興寺文化財研究所の協力を得て画面のX線透過撮影をおこなった。

取得した画像〔図4〕には、一部に現在の画面とは異なる筆致が見られるものの、下層に別の作品があると言える材料は見当たらなかった。したがって、岡本から《誕生》という作品そのものを譲り受け、その上に田淵が《鬼に金棒》を描いたわけではなく、木枠のみを再利用していると考えてよいだろう。

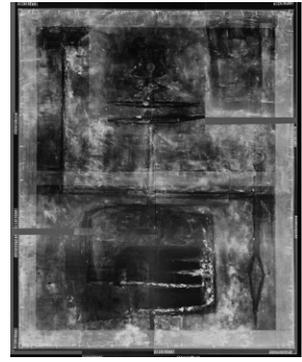


図4 《鬼に金棒》X線透過画像

#### X線透過撮影装置および条件

X線発生装置:MGC30フィリップス社製(現コメットテクノロジーズ・ジャパン株式会社)

画像読取装置:富士フィルム株式会社製 FCR AC-7 HR

画像表示ファイル装置:富士フィルム株式会社製 VF-C1

X線二次元分布計測器:富士フィルム株式会社製 イメージングプレート UR-1型

撮影条件:電圧40kv、電流2mA、距離1m、照射時間2分

### 4. 制作当時の背景について

では、そもそもいつ、そしてなぜ田淵は岡本作品の木枠のみを入手したのだろうか。田淵と岡本の接触前後の動向を整理すると、1945年の復員後、東京大学文学部美術史学科に復学した田淵は、在学中の1947年から新制作協会に出品を続け、1951年5月13日、金山康喜と関口俊吾とともに渡仏した。6月から私費留学生としてソルボンヌ大学に籍を置き、レアリテ・ヌーヴェル展に継続的に出品しながら、1961年11月までの10年余りを、パリを拠点に活動する。アトリエの隣人だった菅井汲のほか、今井俊満、ピエール・アレシンスキー、カレル・アペラと親しく交わった田淵は、1952年11月から5月までパリをはじめ欧州を歴訪した岡本太郎の知遇を得て、翌1953年1月にはハンス・アルトゥングやミシェル・ラゴンらと岡本による座談会の筆記を務め<sup>1</sup>、1955年には帰国後の岡本から二科会出品の誘いを受けるなど<sup>2</sup>、その後も二人の交流は続いた。なかでも注目すべき田淵と岡本との接点は、1953年1月23日から2月7日にパリ、クルーズ画廊で開催された岡本の個展「exposition TARO OKAMOTO」である。

当初岡本は、クリスマスまでをパリで過ごした後、ニューヨークで個展を開催すべく米国に渡る算段をつけていた。しかし米国ビザが得られず、途方に暮れていたところ、クルーズ画廊から急遽個展開催の打診を受けることになった。以降の経緯について岡本は、『芸術新潮』の連載の中で詳しく触れている。それによれば、「かなりの作品と、飛行機で巻いて持つて来た画の枠全部をニューヨーク展の爲アメリカに直送してあつた<sup>3</sup>」ため、ニューヨークを1953年1月15日に出港する船便でこれらの作品と木枠をパリへ回送するよう手配したものの、税関手続きの時間を考えるとヴェルニサージュに間に合うか甚だ怪しいと思

1 岡本太郎、シュネイデール、アルトゥング、アトラン、ラゴン、田淵安一「〈座談会〉現代絵画の課題と方向」『みづゑ』577号、美術出版社、1953年9月、18-28頁。

2 1955年の二科会分裂において運営委員に選出された岡本が、田淵に出品を呼びかけたことに対する返信。岡本太郎記念館蔵、田淵安一から岡本太郎宛書簡、1955年7月30日。『青山時代の岡本太郎1954-1970 現代芸術研究所から太陽の塔まで』川崎市岡本太郎美術館、2007年、no. 119。

3 岡本太郎「ヨーロッパ紀行・2 パリに絵を賣る」『芸術新潮』4巻8号、新潮社、1953年8月、226頁。

い直し、パリに持ち込んでいたロールの作品分の木枠と額は新たに発注することにしたようだ。岡本のパートナー岡本(平野)敏子による活動日記には、同年1月13日に「来田ブチー個展準備相談、枠注文に決定」との記述があり、ここで田淵に木枠発注の事情を含め個展準備の相談を行ったと思われる。しかし「厄介なことに、日本の画は總て尺に合せてあるのでパリでは出来合いの枠が使えない。特別注文が又フランスのことで、一週間もかゝつてしまつた<sup>4</sup>」。開幕まで日がない状況で、岡本は田淵のほか、菅井、今井らにも手伝いを依頼する。「幸い在パリの若い日本人画家達が手傳つてくれ、とにかく飛行機で持つて来た作品だけはすつかり用意を整えたが、それでもとうとう縁を塗るまでの餘裕はなかつた<sup>5</sup>」。

この『芸術新潮』記事の内容を踏まえると、『誕生』は岡本がパリにロールで持ち込んでいた作品のなかに含まれていたと考えるのが自然だろう。これをパリで新規に発注した木枠に張り替えて展示したため、ヴェルニサーージュの夜によくニューヨークから届いた本来の木枠は、その時点でお払い箱となったわけである。それを、おそらくは準備手伝いの謝礼代わりに田淵が貰い受けたのだろう。

クルーズ画廊個展の図録に掲載された図版[図5]から、『誕生』は現在川崎市岡本太郎美術館が《樹人》(1951年 油彩、画布 100.3×80.3cm)という題で所蔵する作品[図6]と同定でき、寸法も《鬼に金棒》とほぼ同じで矛盾はない。ただし、『樹人』の現在の木枠は同館収蔵時の修復過程で新たに作られたもので、修復前の木枠についての情報は見当たらない。

なお、同時期に『誕生』の題を持つ岡本作品としてもう一点、地下鉄日本橋駅に面した高島屋地下通路ためのタイル壁画《創生》のための下絵が存在する。前述の岡本敏子の活動日記の1952年3月22日に「w. タイル下絵 誕生.」、翌23日に「w. タイル下絵 誕生. 両側25号付. 仕上.」、24日に「w. タイル下絵 誕生. 仕上げ」、4月2日に「tel 伊奈製陶—誕生. 下絵写真依頼」などの記述に見られるように、岡本は当初同作を《誕生》と呼んでいた。しかし同年4月24日、同作は《創生》(朝日新聞のみ《創生期》)として報道され、30日の高島屋落成記念でも《創生》として公開された<sup>6</sup>。したがって岡本は、下絵を仕上げたのち、壁画の施工中のどこかの時点でタイトルを変更したことになる。ただし、この下絵は4月27日に高島屋常務取締役・川勝堅一に寄贈されており(現在は高島屋資料館が所蔵)、同作がクルーズ画廊個展に出品された記録はなく、寸法(38.0×144.0cm)も田淵作品とは合致しない。



図5 クルーズ画廊岡本個展図録より『誕生』



図6 岡本太郎《樹人》

4 同記事、227頁。

5 同記事、227頁。

6 「明るい地下鉄にタイル製の壁画を作成」『産業経済新聞』、「地下道に大壁画 岡本画伯の“人間という植物”」『毎日新聞』、「“タイル・モザイク”の壁画 岡本画伯が日参で製作に没頭」『読売新聞』、「タイルで描く」『朝日新聞』、いずれも1952年4月24日。

## 5. 結論

以上のことから、岡本の墨書のある田淵作品の木枠は、岡本が1953年1～2月のクルーズ画廊個展に出品した《誕生》(のちの《樹人》)の、オリジナルの木枠であった可能性が極めて高く、『芸術新潮』における岡本記事の内容を裏付ける物証として注目に値する。

なお、川崎市岡本太郎美術館が所蔵するクルーズ画廊個展の記録写真を収めたアルバムでは、ヴェルニサージュの際の第二室の壁に《誕生》の出品を確認できる[図7]。ただし、同アルバムには同壁面に《誕生》がかかっているカット[図8]とかかかっていないカット[図9]の二枚も含まれている。写真に日付の記載がないため確証は得られないものの、会期中に本作を外すとは考えにくく、展示場所を検討する中での撮影と思われる。



図7 クルーズ画廊岡本個展ヴェルニサージュ(1953年1月23日)  
アトラン、エロールドらと両手を広げ談笑する岡本。  
右手前のコートの襟元に手をやる人物が田淵。



図8 クルーズ画廊岡本個展第二室  
(撮影日不詳)



図9 クルーズ画廊岡本個展第二室  
(撮影日不詳)

## 謝 辞

本調査にあたり、川崎市岡本太郎美術館に資料閲覧のご協力をいただき、また田淵充氏、大杉浩司氏、片岡香氏に多くのご教示を得た。記して感謝する。なお、図5～9はいずれも川崎市岡本太郎美術館より画像提供を受けた。岡本太郎作品および岡本太郎が写る写真は全て©岡本太郎記念現代芸術振興財団。

2024年度 愛知県美術館研究紀要 第31号

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館  
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2  
Tel: 052-971-5511 (代)  
<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>



制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31  
2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art  
1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 JAPAN  
Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2025 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.